

## おしごとえぷろん

閉じた目の中が、明るくなった。

あつたかいひかり。ぼかぼかするからだ。ゆらゆら揺れる足元からは、少し花の匂いもする。

ほんの少しだけ覚えてる、キュアローズガーデンにいたときみたいだ。

「春、かぁロプ」  
ぼかぼか、ゆらゆら。

こんなのを、たしか『うららか』って言うんだよな。ああ、あいつの名前って、ここからきてるのか。

「それにしちゃ、明るすぎロプ」  
オレはちよつとだけ笑ってから、体を起こして布団を跳ね飛ば

「ロプ？」

跳ね飛ばそうとした布団が、なかった。

「なにロプ　ロプ!?」

ちよつとまで、いまオレ、ロプって　まさか。

ばつと目を開けたら、目の前は空。

足元　　っていうか、胸の下は、緑の葉っぱ。葉っぱのすきまからは、地面が結構遠くに見える。

「な、なんでこんなとこにいるロプ!?」

叫んだとたん、体がかたむいた。オレはとっさに羽根を開いてバランスを　　と思ったのに開かなかった。

「とつとつと　　ロプ?」

とりあえず落ちはしなかったけど　　だいたい、なんか、肩とか羽根とか、妙にきついな。

そう思いながら、顔を後に回したら、白いものが見えた。

胸から伸びた、太くて白くて薄いひも。羽根を包むみたいに、首と背中ではリボン結びになってる

「なんで縛られてるロプ?」

\*\*\*\*\*

「やつ、くつ、せいっ はあ、だめロブ」

背中向いて、首を伸ばして、どうにかしてひもを  
ほどこうとしたけど、くちばしがどうしてもとどか  
ない。まったく、なんでこんなことになっちゃまっ  
たんだろう？

ため息ついて下向いたら、葉っぱの向こうに白っ  
ぽいものが見える。さっき匂いがした花だな。たし  
か、サクラとかいう ああ、そうか、思い出した  
ぞ。昨日、花見っていうのやったんだ。

エターナルがなくなつて、もうじき学年も上がる  
し、みんなで揃うことも少なくなるから、つて、か  
れんが言い出したんだよな。かれんの家に、ちよう  
どサクラの木があるからつて言つて

そこまで考えて、オレはあたりを見回した。大き  
な屋敷を囲む庭。ここは、その庭の端っここの木の上。  
「なんだ、ここは花見のサクラの木ロブ」

オレはちょっとだけほつ、とした。知ってる場所  
だ、つてわかったただけで、ずいぶん違う。大きな鳥  
が暴れたつて見つかると心配はないしな。

ほつとしたおかげで、もうひとつ思い出したぞ。  
そっか、いまオレの体に引つかかっているの、

「あんときもらつた、りんのエプロンだロブ」

首を回して、胸元から背中までじつと見直してみ  
た。近くで見ると、あっちこっちピラピラしてる。だ  
から、寝てる間に引つかかっちゃまったんだな  
ああ、思い出したらなんかムカついてきた。

「けらけら笑いやがつてたロブ」

\*\*\*\*\*

昨日の花見。みんなジュースで乾杯したあと、り  
んが近寄ってきたんだよな。

『シロップはさあ、今年もここにのよね？』

とか、下からちよつと覗きこむようにして訊いてく

るから、なに言ってるんだろって思いながら答えたっけ。  
『あつたりまえだろ？ オレには購買のウエイターって  
いう仕事もあるんだからな』  
そしたら、りんが持ってた紙袋をオレに押し付け  
たんだ。

『ちよつと、作ったんだけどね。シロップに。  
いや、ほら、ウエイターやってて、こぼしちゃった  
らまずいかなあ、とか思ってたさ』

『そんなドジしねえよ。のぞみじゃあるまいし』  
ひつどーい、とか正面から声が聞こえてたけど、無  
視無視。

『でねえ、エプロン作ったんだけど て、手先は器  
用なつもりなのよ。でも、布ものはあんまり作った  
ことなくてさ。それでも、本に書いてある通りじゃ  
つまらないなあ、って思いながら作ったら』  
？ なに「チャ」チャ言ってるんだろ、って思ったよ。  
エプロンは店長から借りて着たりしてるけど、自分  
のがあるならそのほうがいいに決まって

でも、ぱつ、と布を開いた瞬間、体が凍っちゃった。  
つけたこともあるし、エプロンなら知ってる。こ  
れも、エプロンの形はしてる。けど、そのまわりに  
知らないものがあつたんだ。ぴらぴら、ひらひらし  
てるものが。

『ふ、ふるる すっごいフリル!? ぷっ くく  
っ あ、あははははっ!』

正面に座ってたのぞみが、オレを指さして咳き込  
むくらい笑いやがった瞬間、オレは、思わずエプロ  
ンつけて、言っちゃつたんだっけ。

『笑うなっつ!!』

これは、りんがちゃんと考えて、想い込めてつくっ  
たもんだ。オレはこれで働く。着ないなんてできる  
もんか!!』

そのあと、しばらく覚えてない。エプロンのひも  
ほどこうとするりんを追い払ったり、困った笑い顔  
で近寄ってくるうららたちにもまたカチンときたこと  
くらいしか ても、最後まで言ってたことは覚え

『絶対取らないからな、このエプロン！』

\*\*\*\*\*

ヒユツ、と涼しい風が吹いてきて、オレは昨日のこ  
とから今に戻った。

「でも、なんでシロップはこんなとこに乗っかっ  
てるロブ？」

いろいろ思い出したけど、それだけがどうしても  
思い出せねえなあ　お、おととっ！

強い風が吹いて、からだがぐらぐら揺れた。落ち  
はしなかつたけど、ふう。

「なんとか、ほどこかないとロブ」

落ちる落ちないだけじゃない。早くほどこかないと、  
昼から聖ルミエールの購買行く約束しちまったんだ  
もんな。

春休みって言っても、クラブで来る子がいるらし  
くて　よく食べるんだ、これが。まあ、うららた  
ちほどじゃないけどさ。

「よしロブー！」

ひとつ気合を入れて、オレはまた首を後に回した。  
結び目までがすこく遠くに見えるけど、もっ少し、ほ  
んのちよっと首を伸ばせれば

「なにやってんの、シロップ」  
ん？

声のする方、木の下を見たら、りんがいた。

昨日と同じ、パーカーにジーンズ姿。大きなバッ  
グを肩からさげて、まっすぐこっちを見上げてる。

「エプロンなんかで遊んでんないで。他の布でもひ  
もでも見つくろってあげるから、降りてきなさいよ」  
遊んでるだつてえ!?　いや、まてよ。

「い、や、ロブ。降りたら、りにエプロン持って  
いかれるロブ。シロップは、絶対とらないロブ」

怒らせて取るうつつあって、そうはいかないからな。

7 おしごとえぷろん

「それにしても、まーだ桜の木に乗ってるなんてねえ。よっぽど気に入ったのね」

!?

「りんロプ？ シロツプをこんな木の上に乗せたのは!？」

オレのからだか葉っぱに沈むくらいの勢いでどなったら、返ってきたのは、はあ、つてため息だった。

「まーだ抜けてないのね。まったくくるみのヤツ」  
右手で頭おさえながら、またため息ついてる。くるみが、どうしたっていうんだ？

「覚えてないの？ あんた昨日のお花見で、ジュースかばかば飲んでたでしょ？ あの中に仕込んでたらしいのよ、くるみ。ふつう、あれだけ飲んだらわかると思うけどなあ」

ああ、そついやくるみがやたらジュース持って追いかけてきたっけ。でも、

「仕込んでたって なにをロプ？」

「お酒よ、お酒。眠らせるつもりだったらしいけど、

あんた酔っ払って、鳥になって木の上まで飛んでっ  
たじゃない。覚えてないの？」

あー、そつか。どつりでいるいる覚えてないわけだ。でも、

「どうでもいいロプ。だいたい、昨日はそうでも、シロツプはいま酔っ払ってないロプ」

いまはそれより、エプロンはずす方が先だ。りにやらせるわけにいかないし、なんとか自分で、あと少し首伸ばして

「いや、酔ってないつてあんた 人間に変身すれば自分で取れるでしょ？ そのエプロン、人間サイズだし」

え？

一瞬、なにを言っているのかオレにはわからなかつた。

下を見れば、きゃらきゃら笑ってるりんの顔。

だんだん、顔が熱くなってるのが自分でわかる

「えいっ！」

ぼんつ、と白い煙と一緒に、人間になったオレのからだは落ちていく。

サクラの葉っぱを抜けるところで丸まって、地面に背中から落ちてから、オレは立ち上がってエプロンを待ち構えた。背中痛みはそれほどでもないやサクラの枝がいくつか折れちまつたけど。

ひらひら落ちてきたエプロンをカバンに押し込んで、オレはもう一度鳥に変身した。

最初からそうすればよかったんだ。カバンのなか、メルポにはちよつと窮屈かもしれないけど。

近寄ってきたりに顔だけ向けて、オレは飛び上がった。

「人間のとき絶対取らないロブ、このエプロン！」

\*\*\*\*\*

「行っちゃったね」

近くの茂みから、いつもの声が聞こえてきた。

あたしが、シロップが飛んでいった空を見上げてたら。

「行っちゃいましたね」

「ええ、行ったわね」

それに続いて、2つ、3つ。いままで隠れてた声が出てくる。

桜の木の下に、昨日と同じメンバー　と言つても、ココたちはくるみ特製ジュースのせいでまだ寝てるけど。

それにしても。

「はあ　やつぱ、見せなきゃよかったかなあ。自信なかったし」

おもわずため息まじりにこぼれたけど。

「かわいくて、いいデザインじゃない。シロップに、とつてもよく似合ってるわ」

「問題は、本人が男の子だ、ってことだけですよね」  
すぐにみんなフォローしてくれる。けどそのフォ

ローが痛いよ。

「それが一番問題なのよ。調子に乗って作っちゃったあたしも悪いけど、ああ意地になって着られてもねえ」

意固地になっちゃったのはのぞみが爆笑したからだけど、元はあたしのせいなんだもんね

「シロップ、そんな意地悪じゃないですよ」

え？

うららの声がさつきと違つ。あたしを慰めてた声じゃない。

「そうね。むしろ、まじめ過ぎるだけじゃないかしら？」

え、え?? かれんさんも？

「そうそう、たーんじゅんなんだもん、シロップって」

おいおい、それは悪口だって。

さすがに一言返してやろうと思つて顔を上げたら、のぞみの顔が目の前にあつた。

「たーんじゅん。だけど、やさしい子だよ♡」

そうかな。

あたしはにつこりした親友の顔から目を上に移した。シロップが飛んでいったあとは、青い空に白い雲。

そうかも。

「信じましょつか、わが親友たちをね」

\*\*\*\*\*

「遅くなりましたあ」

学校の裏手で鳥から人間に変身して、オレが購買に駆け込んだのは、約束の時間ギリギリだった。

奥から出てきた店長さんに頭下げて、そのまま店に出ようとしたら、

「おやまあ、かわいいエブロンじゃないかい？」

店長さんが笑いながら声をかけてきた。

「ええ。かわいいみたい、ですね」

肩からすそまでのびらびらをとのえて、またすぐ店に出ようとしたオレの肩に手が置かれた。

「ん？ シロタは、嫌いなのかい？」

「そこまでじゃないけど」

オレは心の中のため息ついた。こりや、仕事してもいろいろ言われるか

「ははあ」

そうかい。でもねシロタ、ここは食べ物屋だよ。汚しちゃうのかねえ？」

？

「別に 仕事着は、汚れたほうがいいし」

言ってる意味がわからないまま、オレは言葉返した。エプロンだって仕事着なんだから、汚れるのは当たり前じゃないか。

「そうだねえ。確かにエプロンってのは、汚したぶんだけ価値が出るようなもんだけどさ」

そこまで言って、店長さんはちよつと目を閉じて息をついた。

なんだろう、って思ってるところに、目を開けた店長さんの顔。

「でもね、シロタ、汚しちゃいけないんじゃないかねえ、『作つた人の思い』は、さ？」

見間違ひ、だよな。いま、一瞬、フロアの顔に見えた、けど。

オレはまた、エプロンをとのえてみた。さっきは気づかなかつたけど、ところどころに糸のかたまり。切りすぎたびらびらをつないだ跡

「やっぱ、いつものエプロンください」

オレが顔を上げてそう言うと、ニヤニヤ笑いながら、店長さんがエプロンを渡してくれた。

「たからもの、かねえ」

「そんなんじゃ」

いや、ちよつとだけ、そうかもしれないな

ニヤニヤ笑いが、ふつ、とおさまったと思ったら、目の前の顔がにっこり笑った。



つられて、オレも笑った。その瞬間、

「メル」

カバンの中から頭だけ出してきたメルポと、オレは目が合った。

「つられただけ、だからな」

こっそりひとこと言って、オレはカバンを店の奥に隠した。

そうだ。ほんとに、つられただけなんだぞ。

頭の中に、あいつの姿なんて出てきてないからな！

—おしまい—